

自他のちがいを受け入れ、自分の心の変化に気づく交流活動 ～ スペシャルオリンピックス（SO）との連携を通して ～

Point：自分とのちがいを受け入れにくい生徒が交流活動を行う中で、自己の変容を実感できる自己評価を通して、他者理解を深める。

1 ねらい

本校は、数年来人権教育カリキュラムの流れを踏襲し、年2回の人権教育月間においても資料集を利用しての知識伝達型の学習が多かった。そこで、交流活動との連携や統合を図り、学年独自で継続性のある題材展開を試みた（図1）。スペシャルオリンピックス（SO）の支援を受け、フロアホッケーを体験活動のための学習材として位置づけた。

2 内容

(1) 学年題材・カリキュラムの開発

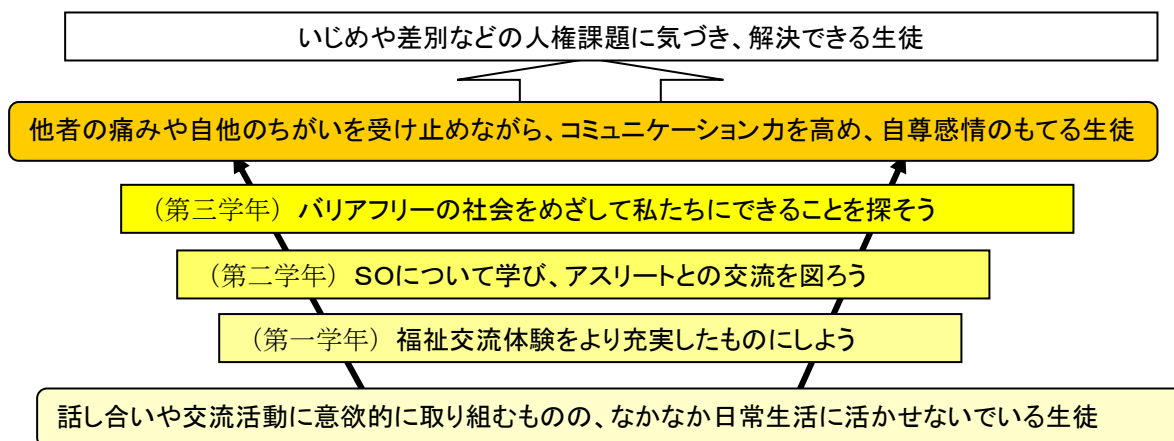


図1 学年題材を通したカリキュラムの発展性

お互いに楽しめる交流活動にするための留意点

- ・ 相手がしたいことをするだけでは、互いに楽しめないことを共通認識する。
- ・ 自分の感情や思いを表現しても、相手が受け入れてくれることを意識させる。

(2) SOとの出会い・連携

本校では、NPO法人スペシャルオリンピックス日本名誉会長 細川佳代子先生との出会い、フロアホッケー体験をするなど、スペシャルオリンピックス（以下SO）を知る機会を得た。そして、スペシャルオリンピックス日本・長野・松本プログラム代表の中村嘉也さんにコーディネーターになっていただき、SOについての講話やボランティア体験、アスリートや家族の講演をおこなった。生徒はSOの学習を契機として知的障害についての理解を深め、交流への意欲を高めつつある。

中村さんの言っていたように、まず声をかけたいです。今までSOとか障害のある人は、自分とは違う世界みたいに思っていました。できることなら、すぐにボランティアをしたい気分です。私たちの今できることを見つけて行動したいです。「自ら考え、行動する」を忘れないでください。

(3) 知的障害者授産施設の方々との交流

《活動の概要》

- ・ パートナーを組んで、フロアホッケーや太鼓の演奏を通しての交流。
- ・ 施設訪問をして、仕事の見学。



(4) 交流活動の振り返り

交流活動の中で、パートナーに対する自分の気持ちがどのように、変化していったのか振り返りを行った。

「交流会の最初の自分」と「交流会の終わりの自分」を付箋に記入し、模造紙に貼りだすことによって、自分の変化を明らかにさせた。

「どうしていいのかわからなくて不安で、なかなか声がかかれなかった。」→「笑顔で返事をしてくれてうれしかった。」「今まで、障害のある人を避けていたような気がした。」→「気軽にハイタッチをしたりしてくれて、うれしかった。障害があるなんて関係ないと思った。」などの言葉が付箋に記入された。パートナーの明るい姿にふれ、自主的に活動できるようになった自分や仲間の姿を確認することができた。



(5) 交流会を重ねる中での心の変化

最初は、本当に不安でどうしようかと思ったけど、あいさつをしたら、ちょっとだけそれがポーンと飛んでいきました。思いきって「ピンク好きなんですか？」と聞いたら笑顔で「はい」と答えてくれました。うれしかったです。今回の交流で自分が変われたらいいなあと思いました。 <第1回交流>



前はパートナーの人がぜんぜん笑ってくれなくて不安だったけど、今回は自分から積極的に話したら笑顔になってくれた。 <第3回交流>

パートナーは楽しんでくれたけれど、気を遣いすぎて自分が楽しめなかった。今度は、こっちから心を開いて交流を楽しみたいと思った。 <第4回交流>

今回はパートナーの名前を呼んで、遠慮せずにできて楽しかった。気を遣わないで普通に接して、とにかく笑顔でいたらすごく楽しかった。

<第5回交流>

3 評価等

○子どもたちは、アスリートとの交流活動を重ねていく中で、自他のかけがえのなさを実感するとともに、「次回はこうしたい」という目標をもって交流できるようになり、活動を振り返る中で自分や級友の成長を認め、自尊感情の高揚へつながっていった。

○自分の感情や思いを表現しても、パートナーが快く受け入れてくれ、子どもたちもパートナーもお互いに充足感を得ることができた。こうした交流活動によって、他者理解が深まり、大勢の生徒が「今後いじめをしない自信がある」と、はっきり意思表示をすることができた。

(『集まってひとつの花 生徒指導・人権教育取組事例集～いじめのない集団づくりのために～』(長野県教育委員会) より)